

クリスチャンホーム

第1章

神様—結婚—神様のご計画

クリスチャンの結婚について、一緒に考えてみましょう。結婚は、神様のご計画でした。クリスチャンの結婚とクリスチャンホームとが、どんなものかを見てみましょう。神様の目から見て、結婚するとはどんな意味でしょうか。クリスチャン夫婦が、聖書に従ってクリスチャンとしての正しい考え方をもち、責任を果たしていくためには、お互いは何をすべきでしょうか。結婚と呼ばれている、神様が示す教えについて考えてみましょう。

結婚は、人がエデンの園で犯した罪とは対照的で、私たちに定められた唯一の儀式です。(創世記2:21-

25) 神様は、罪がこの世に入ってくる前に結婚を定め、人間がこの地上に満ち足りて、豊かで楽しい生活をすごすように決めました。もし結婚が失敗に終わるなら、その原因は結婚制度そのものにあるのではなく、不注意によって結婚の条件を満たせなかった人間にあります。実際、結婚はとても大切な神様の計画です。

エペソ人への手紙の中で、教会との関係で結婚について述べています。

「キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。・・・そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。」(エペソ人への手紙 5:23-

25,28) 教会は家庭を反映するものであり、家庭は教会を反映するものであるべきでしょう。

神聖な結婚関係

結婚するときには、いろいろなことを期待します。ある人々は、肉体的魅力、経済的安定、物質的安定、情緒的安定、性的調和、両親からの独立、嫌な家庭からの逃避、自己嫌悪などのまちがった動機から結婚します。動機が不純であれば、その結婚は遅かれ早かれ壊れてしまいます。結婚する二人は、結婚前にお互いに対して本当に正直に心を開かなければなりません。過去に付き合った人々との社会的、精神的、肉体的関係などについて、率直に尋ね合うべきです。正直に話し合うことによって、将来その結婚が壊れてしまうような事態を防ぐことができます。

実際、ロマンチックな関係を持つためには、時々離れてみる時間も必要です。これは、神様の意志を確認する基本的なことです。一時期離れていることで、あなたが自分の結婚相手とより親密になれるか、ほかの人に心が向いているか分かります。あなたがたの関係を、ぜひ時間をかけて確認してください。

神様は、私たち一人一人が結婚によってその必要を満たすように計画されました。配偶者、家族、社会への適応、性的関係、そのほか多くの必要が結婚によって満たされます。

「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」(エペソ人への手紙5:31) 神様は、人を慰め、幸福にし、健全に生かすために、結婚を定められました。それは、神様独自のご計画です。人間の考えによって後天的にできた関係ではありません。また、人間が生存するようになったときからの習慣でもありません。さらに、せつな的に結ぶ単なる人間関係でもありません。

結婚は、神様の創造の一部分であり、神聖なご計画です。お互いが生涯をかけて築き合うように定められています。「

こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」(マルコの福音書10:9)

男性と女性が肉体的にも精神的にも一つに結び合い、子どもたちをこの世に生み出す幸いを持つことこそ、神様の定められたご計画です。

この地上で、結婚関係ほど親密で神聖な人間関係はありません。その関係は、親子関係にも勝るものです。私たちの救い主ご自身が言われました。「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」(創世記

2:24) このことは、決して両親をおろそかにすることではありません。結婚関係とその義務について述べています。男性と女性が結婚の誓約を交わした瞬間から、お互いに最高の関係が生じます。

福音を教える牧師は、クリスチャン同士の結婚を執り行うべきです。結婚は厳粛なものであり、よくも悪くもなる可能性を持ち、永遠の運命によって夫婦が密接な関係を持つもので、初めに安易でいいかげんなスタートをすることは許されません。結婚で二人の心と命が結び合わされ、人生を共有します。これは、人が罪を犯す前に定められた神様独自のご計画でした。「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」(創世記2:24) 一つとは、分かれることのできない数を意味しています。

ここに、結婚に関する神様の教えの有名な引用文があります。「もし女性が男性を支配することが神様のご計画なら、神様はアダムの頭から女性を造られたでしょう。女性を男性の奴隷にするご計画なら、アダムの足から女性を造られたでしょう。しかし、神様は男性のわき腹から女性を造られ、男性のよき助け手であると同時に、同等なものとして造られたのです。」(アウグスチヌス)

誓約

結婚の結びつきを解くものは、死だけです。結婚式では、夫婦が「愛し、尊敬し、死によって別れるまで節操を守る」というお互いの誓約に焦点が当てられます。未来にどんなことが起ころうとも、儀式でなされた誓約は絶対です。「よいときも悪いときも、病めるときも、健やかなるときも、富めるときも、貧しいときも」そうなのです。神様の前に立つ二人は、死が別つときまで有効な誓約を交わします。神聖な誓願が交わされ、二人の心と命が神様の承認によって結び合わされ、その聖なる結婚式が執り行われている間、いつも歌声で満ちている天使たちが歌をやめ、不思議な静寂が高まっていくような、そんな神聖な情景を思い浮かべてください。このように、結婚式はとても清く神聖で、クリスチャンに対する神様の摂理に満ちているため、その意味を理解するクリスチャン同士の間だけで執り行うべきものです。神様のご計画を軽く取り扱って、汚さないようにしましょう。

結婚が神様の祝福を証明するものであるならば、結婚する二人には一体何が求められるでしょうか。何を心に抱かなければならないのでしょうか。何がこの二人の新しい関係を支えてくれるのでしょうか。調整する必要のあるものや障害になったりするものがありますか。それらのいくつかを考えてみましょう。

愛の一致

教会の牧師なら、誰でもこの真理を知っています。二人の命が一つに結び合うとき、初めのうちは、必ず生活のぶつかり合いが起こります。すべての人は、違った生い立ち、家族、感情、個性を持っています。たくさんの調整があるので、理解し合う心を持たなければなりません。男性と女性の考え方に大きな違いがあることに気づき始めます。女性にとって大切なものが、男性には重要でないときがあり、男性にとって重要なものが、女性には大切でないことがあります。しばらく交際していると、二人の習慣や好みや趣味が、思った以上に違うことがわかります。もし二人が全く同じなら、結婚生活はすぐに飽きてしまうでしょう。神様は、私たちを異なる者としてお造りになりました。成長するに従って、お互いを認め合うことができます。

こうした違いを調整する最もよい方法は、次の3つの言葉を何度も使うことです。「ごめんなさい。許して。愛しているよ。」これを補足する聖句は、「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」(ヤコブの手紙2:19)

あまりにも違いがあることがわかると、がっかりし、この結婚は大間違いだったとすぐ結論づけられます。もう一度考えてください。結婚生活は、お互いに対する犠牲と調整が必要です。結婚前の楽しかったことや熱烈な恋愛は、すぐ消え去ります。もう一度言いますが、神様のご計画は、結婚で二人の命が一つになり、そのときからお互いが何をするにも助け合うということなのです。「人は、一緒に住んでみなければわからないし、お互いを知ることが結婚生活の喜びなのです。」と言う人もいます。

結婚がどのように作用するかを考えてみましょう。あなたは、二つの川が合流するところに立ったことがありますか。一方の川は泥流で、もう一方の川は清流としましょう。二つの流れが合流するところには、はっきりと分離帯ができます。泥流と清流は、はっきり

区別されるのです。その合流を少し下ってみると、もうその区別がつかなくなっていることに驚くでしょう。二つの流れが、完全に合流したからです。それが、二人の命が結婚によって一つになるということです。一つになって完全に融合するのは、決して強制的であってはけません。序々に、静かに、少しずつ溶け合った二つの命は、何の障害もなかったカップルよりもよいものとなり、より高貴になり、さらに強く結ばれるでしょう。二人は道徳的にも立派になります。主イエス・キリストにあって結び合わされた命は、落ち着いた平和な流れのように、すばらしい関係になっていくでしょう。

いらいらや自己中心の中にいると、悪魔が二人の関係を壊そうとします。クリスチャン夫婦は、「離婚」について考えたり、話し合わない合意が必要です。離婚は、何の解決にもなりません。離婚すればすべての問題が解決すると考えるのは、悪魔の誘惑です。二人が神様のみ旨を探し求め、神様が一緒にしたのならば、神様の恵みと導きと忍耐によって、離婚を乗り越えることができるはずですが、将来、過去を振り返るとき、結婚における本当の愛の一致を理解して、そのすばらしい関係を喜ぶことでしょう。必要なのは、ほんの少しの知恵ある忍耐です。お互いがお互いに対して忍耐強く、かつ思慮深ければ、調整は簡単にできるし、神様のみ心の中心にいるなら、結婚はこの地上における最上の人間関係であることがわかるでしょう。

結婚生活のスタート

結婚関係を築くことは、簡単ではありません。それは、結婚生活の幸せについて考えるよりも、結婚生活の質素で平凡な仕事ばかりを考えるからです。研究のために、科学者が長い間実験室に閉じこもっているときや、赤ちゃんが障害を持って生まれ、その母親の心が悲しみにあるとき、「あなたは幸せですか、不幸ですか。」などという分かりきった質問で悩ませたりはしないでしよう。こんな質問は失礼になります。

結婚には、最後まで献身が伴います。結婚する前によく承知しておき、結婚生活の中で、その義務をよく果たすように心がけるべきです。そうすれば、成功するはずだった結婚とか、失敗するはずだった結婚というものは、決してありえません。

幸福の権利は、献身と勇気と自己犠牲によって獲得します。神様にある結婚で二人が一つに結ばれるとき、これら三つの要素がみ心にかなる幸福と喜びをもたらします。

「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」(エペソ人への手紙 5:21)

幸福は、最終目的ではありません。幸福は、風のように移り変わります。幸福は、神様のみことばに従って、神様のみ心を従順に行った結果です。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。」(ピリピ人への手紙 2:13-14)

クリスチャン夫婦にとって結婚とは、二人が一つの新しい生活を始めることです。

もし幸福になることが結婚の最大目的なら、その幸福は幻のように消え去ってしまします。しかし、夫婦が結婚生活を守るために犠牲を払い、忍耐し、許しあい、どんな代価を払っても結婚を成功させようと決心するならば、その夫婦は幸福を獲得します。結婚は恵みの一つで、人間的で一時的な幸福とは違います。結婚は、三角形のようなものだと考えましょう。底辺の2つの角は、あなたとあなたの伴侶です。三角形の頂点は、神様です。底角の二人が互いに近づくと、自動的に神様に近づいて、「あなたがたの力を主が喜ばれる」(ネヘミヤ記8:10)ことがわかるでしょう。

親切とやさしさ

もしあなたが結婚しているなら、伴侶が結婚前ほどのようにあなたのことに気を使ったかを思い出してください。お互いを十分に喜ばせることはできなかったでしょう。結婚すると、「愛しているよ。」とか「あなたのことを神様に感謝しているわ。」とか「君は特別だよ。」といった、生活を潤し励ますやさしい言葉が少なくなりがちです。お互いの幸せに大きな役割を持っている小さなやさしい配慮が消えていきます。もちろん、これは一方的なものではありません。夫がそうした配慮を何度か怠ると、妻も同じようにそうした配慮が亡くなります。結婚生活の成功には、こうした励ましあう言葉が必要です。相手に対するこのような細かい配慮が大切だということを、肝に銘じておきましょう。

私たちの心には愛がありますが、ひどい仕打ちにいつまでも耐えられるような愛はありません。私たちの心に家族愛が満ちていると、細かい配慮がおろそかになっていることにとっても敏感になります。家族愛は、尊くて丈夫な植物のようなものですが、水や太陽のようなやさしさと親切な行為がまったくいらぬわけではありません。結婚した夫婦の家族愛には、親切や愛情や思いやりがとても必要です。これらがいないために、多くの夫婦が離

婚します。「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」(ヨハネの手紙第一 3:18)

一つになる夫婦愛

お互いに心から愛し合っているけれども、二人の心が離れることはよくあります。結婚前は、相手の好むことをおたがいに見つけ、できるだけのことを行います。そうすることが、お互いのためになると確信しているからです。しかし、結婚後は、夫は事務所を構え、自分の用事をし、社会的義務と日々の雑用に追われだします。気がつくとお互いの心が離れており、簡単に誤解が生じます。お互いの興味が、あまりにもかけ離れてしまったからです。

このすれ違いを解決する最もいい方法があります。私たちは、あるすばらしい夫婦を知っています。二人はそれぞれにとっても忙しい日々を過ごしています。しかし、お互いがかけ離れないように心がけています。いっしょに聖書を読み、お互いの問題や希望について感心を払います。いっしょに礼拝を守り、いっしょに祈ります。何年かたつと、夫婦愛は完全に一つになるのです。夫は、その妻の興味に対して、誰よりも大きな関心を払います。もし夫が無関心なら、神様からいただいた最高の宝に対して関心を払わないという、大きな過ちを犯すこととなります。結婚とは、自分に最適の伴侶を探すだけでなく、自分も相手に対して最適の人になることです。相手に対して最適な自分になるためには、イエス・キリストと健全な関係を保たなければなりません。そうすれば、お互いに健全な関係を保てるようになります。次の聖句を読んでください。

「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」(コロサイ人への手紙3:12-17)

許しあう夫婦関係

結婚生活の中では、どちらが先に許したり、謝ったりするべきかを計算できるものではありません。本当の愛なら、そんなことを決める必要がありません。そんな取り決めは、愚かなことです。言葉で傷つけ合う日があれば、すぐ修復しましょう。もし、言葉や怒りで傷つけあう日があるならば、このみ言葉が適切でしょう。「怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。」(エペソ人への手紙 4:26) 眠る前には、必ず夫婦の和解があるようにしましょう。「ごめんなさい。」という言葉で心は平安になるし、ぐっすり眠れるようになります。本当の愛は、許しが最初にあるときに光り輝きます。プライドは、結婚生活にまったく必要ありません。結婚前ですら、不必要なものです。もちろん、今もいりません。

イエス様を家庭に

イエス・キリストや聖書を、日常会話から遠ざけるのは大きな誤りです。イエス様は、ご自分の家庭をお持ちになりませんでした。家庭を愛されたし、いろいろな家庭で多くの時を過ごされました。イエス様の存在は、家庭の中に不可欠です。イエス様はあなたの家庭を愛し、いつでもお客として招かれたいと望んでおられます。イエス様をお客としてお招きするとき、家の中や人間関係を特別にとり繕う必要はまったくありません。イエス様なしで、本当に深くつながり合う愛などありえません。男性と女性が平和に生活しているかのように見えても、イエス様と結びつかないなら本当の家庭ではありません。どの家庭も妻が中心であり、夫がかしらであり、夫のかしらはキリストであり、キリストのかしらは神様であるべきです。

「しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」(コリント人への手

第2章

夫一家のかしら

まずはじめに、男性と女性は違う存在ということを受け入れましょう。男性は男性の性質を持っており、女性は女性の性質を持っています。男女の肉体的形体が、体内の細胞の染色体の構造まで違います。男性と女性は、肉体的にも感情的にも、心理学的にも精神的にも異なります。神様はまず男性を造られ、助け手が必要ということで、イヴを造られました。同時に、二人とも神様の似姿に造られました。「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」(創世記 1:27) つまり、二人は神様の前に同等です。

神様は、夫にはっきりとした義務をあたえることによって、夫と妻にそれぞれに違う役割を明確に与えられました。

「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」(エペソ人への手紙5:25)

「そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。」(エペソ人への手紙5:28)

神様は、夫の前に何と高い目標を置かれたのでしょうか。どんなときも、夫は妻に対して、気遣いを示すことを要求されました。それは妻を愛し養うこと、守ること、そしてキリストが、教会に持っていると同じ自己犠牲の愛を持つことでした。夫がこのように妻に接するとき、妻は「主に対する」ように夫を敬い、従うことができます。夫は、妻を自分の所有物としてではなく、伴侶と理解しなければいけません。

事実、このような夫婦関係は、夫の祈りに決定的な影響を与えます。

同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」(ペテロの手紙第一3:7)

このように、二人の関係が、男性の精神生活に計り知れない影響を与えます。この関係は、精神的や道徳的なことだけでなく、肉体的にもいえることで、尊敬と荣誉と愛があれば、主によりよく仕えることができるのです。

エデンの園で、地に満ちて増え広がることが創造の目的だと、神様ははっきり言われました。増え広がることは、常に神様のご計画の証拠になっています。この聖句のご命令を見れば、神様は現代社会における異常な性的関係を絶対許されません。

「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(創世記 1:28)

現代人がどんなに反論しようとも、同性愛は創造主のご計画に反する害悪なのです。彼らは、肉なる子孫を残せません。ソドムとゴモラが、同じ罪を犯しました。神様のご計画に違反した者を裁く例として、神様は彼らを滅ぼしたのです。このことに疑問があるなら、次の聖句を読んでください。

「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。」(ローマ人への手紙1:26-27)

「夫」とは、「家を結ぶ者」という意味です。夫は、家庭を一つにまとめる者です。もしこのまとまりが壊れると、家庭はバラバラになるでしょう。夫はまさに指導者であり、保護者であり、たくさんの「優しい愛」を与える者なのです。

家のリーダー

妻に対する夫の義務は、「愛」の一語に要約できます。

「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」(エペソ人への手紙5:25)

ほかに選択肢はありませんが、愛の高さと深さをどのように測ればよいのでしょうか。「大好き」という語は、次のように使います。「私は、自分の車が大好きです。」「私は自分の犬が大好きです。」「私は馬に乗るのが大好きです。」ところが、夫婦の関係の中でこの語を使うと、それははるかに重要性を帯びます。

聖書は言います。

「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」(エペソ人への手紙5:25)

鼻で息する人間には、この愛の本当の意味を理解することはできませんが、理想的な夫になるには、誰にでも要求される目標に違いありません。夫がこの目標を心から受け入れるなら、自己中心的な愛は、結婚式のときからすべて消えているはずで

す。この愛と結婚生活は、どのような関係にあるのでしょうか。結婚すると、妻は夫に対していろいろな立場をとりますが、もっとも大切なことは、夫の最高の友人になることです。次の聖句は、この愛をはっきり理解する助けになります。

「人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」(ヨハネの福音書15:13)

イエス様は、十字架でその模範を示されました。私たちも、最高の友人である妻に対してそう努力するのは、そんな愛と結婚生活について考えてみましょう。

妻は、結婚するといろいろな役割が増えます。役割そのものは何も悪いことはありませんが、神様は家庭の中の優先順位をつけておられるので、それに従わなければなりません。夫はその優先順位に責任を持ち、家庭の中で模範的に指導すべきです。その役割を、妻に押しつけてはいけません。妻は夫に従い、助けるなら、聖霊の教えに共に導かれます。

夫は、家庭での食事の祈りや祈り会るときは、妻や子供たちに対してリーダーとなるべきです。神様の言葉を学び、家庭内で起こるいろいろなケースに聖書の教えと真理を導きます。家族を教会に送り出すのではなく、教会に連れて行くのです。家庭と教会は、イエス・キリストをかしらとする結婚生活を夫婦で建て上げる場となります。

夫の役割

愛情はたくさんあるのに、リーダーシップがまったくない男性がいるかと思えば、リーダーシップはとても優れているのに、愛情がまったくない男性がいます。男性は、与えられた能力を超えて、しばしば精神的に高慢になりがちですが、バランスが大切です。夫と妻の両方が、自分の役割にバランスを保たなければなりません。このバランスが壊れると、家庭の結婚生活に緊張とストレスがもたらされます。家庭は第一であり、時間をかけてバランスをとる必要があります。夫には会社で会議があり、教会の活動も週に何回かあり、あるいはスポーツなどもするでしょう。たくさんのやるべきことがあるために、夫は家庭からまがいなく遠ざかります。

ところが、聖書は、家庭生活を最優先にしなさいと、はっきり命じます。鍵は、その命令に「従う」ことです。

1. 聖霊に従います。(エペソ5:18-19)

2. 神様を恐れ敬って従います。(エペソ5:21)

3. 妻は夫に従います。(エペソ5:22)

4. 夫はキリストに従います。(エペソ5:25)

5. 子供たちは両親に従います。(エペソ6:1)

6. 召使は主人に従います。(エペソ6:5)

7. 主人は天の神様に従います。(エペソ6:9)

夫の責任

「愛」という語には、たくさんの責任と意味が含まれます。結婚式の誓約で、夫は全面的な支援を誓いますが、不誠実な夫はこの義務を果たしません。責任を果たさない夫に対して、聖書ははっきり次のように言います。

「もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。」(テモテへの手紙第一5:8)

普通、家計を助けるために妻が外で働くのは、特に子どもが家にいるのであれば、最善の方法ではありません。心理学者は、子どもの命に最も衝撃的な影響を与えるできごとは、生まれて最初の6年間に起こると言います。子どもの命をはぐくむ母親かベイベーシッターが、その役にあたるでしょう。神様は、どちらに子どもの命を託したいと思われるのでしょうか。やむをえない状況から、ベイベーシッターに預ける場合もあるでしょうが、それは当たり前のことではありません。夫の責任は、家族の必要を満たすために、神様の前で自分の責任を果たし、最善を尽くすことです。

この点において、多くの夫が失敗します。子どもや妻を愛して、その必要に応えるあまり、神様を忘れてしまうのです。そのため、神様への奉仕や宣教の働きをせず、逆に「なぜ神様は、もっと豊かに私を祝福してくださらないのだろうか。」と不思議がるのです。

「あなたの神、主を心に据えなさい。主があなたに富を築き上げる力を与えられるのは、あなたの先祖たちに誓った契約を今日のとおり果たされるためである。」(申命記8:18)

誠実で賢い夫は、神様にささげるものを、妻や子どもたちに与えたりしません。歴代誌第一8-

9章には、クリスチャンホームになくてもならない教えが、はっきりと述べられています。夫は、家庭の必要を満たさなければなりません。究極的には神様がその必要を満たします。あなたが神様に仕えるなら、神様も次の約束を守ってください。

「また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」(ピリピ人への手紙 4:19)

夫の目標

結婚式で男性が女性に手を差し伸べる行為は、「地球上のすべての女性の中から私はあなたを選んだ」という意味です。結婚によって二人が一体になることは、お互いに影響力を持つことを意味します。この特別な相手に対して、優しい愛と理解を持つことにほかなりません。二人が一体となって生活するとき、神様はこの特別な命令を与えます。

「同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということを知りまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」(ペテロの手紙第一3:7)

妻にまちがった方法で接すると、祈れなくなったり、生活全体が乱れていきます。妻の外面的な美しさは衰え、顔にしわが寄り、声に潤いがなくなります。病気で衰えがひどくなったとしても、夫はそれまで以上に妻を心から真実をもって愛さなければなりません。

「キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」(エペソ人への手紙5:25)

これが、クリスチャンの夫に求められる高い目標であり、どちらかが天国へ行くまで守るべき目標です。

「危険区域」・・・女性に対する接し方や考え方に、気をつけなければなりません。「肉の欲」は男性が最も陥りやすい誘惑で、サタンはこれを利用して、あなたの結婚生活を壊そうとします。「そんなことは自分にはありえない」などと言わないでください。ダビデやソロモンやそのほかの男性の話しを読めばわかります。心と魂を肉の欲から守らなければいけません。男性は、純粋な心で女性に接しなければなりません。(テモテへの手紙第一 5:2)

どんな性的思いや行為も、結婚生活以外では避けるべきです。(エペソ人への手紙 5:3-4, ヘブル人への手紙 13:4)

ヨブは「目と契約を」(ヨブ記31:1) 結びました。性的欲望を持ってほかの女性を見ないようにしました。自分の結婚生活を守るためには、自分の目を保護しなければなりません。テレビでそういう場面が出てきたら、チャンネルを変えましょう。雑誌でそういうものが出てきたら、ページをめくりましょう。コンピューターの画面に出てきたら、急いで消しましょう。もう一度言いますが、自分の目と心を守るなら、精神も守ることができます。そんなことは自分でコントロールできると思うかもしれませんが、それは誤りです。神様が示しておられる唯一の答えは、「避ける」ことです。
「それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」(テモテへの手紙第二2:22)

思いやり

男性は、ほとんどの場合、思いやりについて無関心です。問題は、家庭にいるときは気をゆるめ、気ままにふるまうことです。外に出たときは、極端なまでにきちんとしています。見るからに礼儀正しく、気配りを怠りません。職場では女性の感情を害さないように注意するのに、家に帰ったとたん、一日中気をつかい続けたすべての緊張を解きほぐします。言葉も荒々しく短くなり、無愛想になります。質問に答える声もいら立ち、短気で投げやりになります。その理由は、たとえ妻を邪険に扱っても、その女性が妻であり、妻である以上は愛されていることを知っているはずだと考えるからでしょう。ほかの女性ならば、傷つけることとわかることも、妻だから、夫の言動を気にするはずはないと思い込んでいます。ところが、妻にも不機嫌な日があり、受け止められないこともあることを、忘れてはいけません。

家庭内で起こるもう一つの大きな過ちは、夫が最大の努力を傾けて、親切や忍耐を実行しないことです。夫が汚ない言葉やひどい言葉をまったく言わないということは、優しい愛情のこもった言葉もめったに言わないという裏返しです。会話は短く、ぶっきらぼうで用件だけになります。新婚当時の愛情あふれる夫の優しさは、どこへ消えてしまったのでしょうか。「愛して大切にする」という約束は、すっかり忘れ去られてしまいました。でもそれでは、あまりにも短すぎる約束ではありませんか。言葉で約束した愛情は、実行を伴わなければ死んだも同様です。

夫が妻に対して、とりわけ配慮深くかつ思慮深くすべきときがあります。子供が一日中病気だったり、言うことを聞かずに妻を悩ませ、家事も手につかずほったらかしになり、いつもと違って子どもの世話にかかりつきりになるときです。妻は傷つき、寂しさを感じています。そんなとき、もし夫が妻に優しくするなら、妻の嫌な気持ちもすっ飛ばしてしまいます。その日の嫌なことを忘れさせ、心に喜びを取り戻すためには、ほんの一握りの思いやりで十分です。

相談相手

当然のことですが、自分にふさわしい妻だと夫が感じるときは、妻を理解し、賢い妻として尊敬します。ところが、結婚後、妻を子どもと同じレベルで取り扱う夫たちもいます。仕事や日常の諸問題を分かち合いません。妻は、夫の仕事に関するすべてを知りませんが、よき相談相手になったり、時々はもっとすばらしい考えを持っています。箴言31章は、夫が妻の助言を求めるのは、知恵のあることと教えます。妻は、夫が細かく考えるように物事を考えません。男性の論理はゆっくり核心に到達しますが、時として女性のひらめきが、かなり確信に迫ることも事実です。妻にかかわる日常の問題が多少なりとも取り除かれると、妻の判断力はもっと明解になり、さらに正確さを増すでしょう。夫の仕事のことで、妻に相談するのは賢い判断です。多くの男性が、大部分の幸運は妻の判断のお陰だと感謝しています。

横暴な夫

頭と心は、同時に働きます。職場では無視されるおとなしい夫でも、家庭ではひどく横暴な人格に豹変することがあります。そういう夫は、家族団欒の中で、家族を専制的に支配する横暴者で、妻や子どもたちを野獣のように命令したり、脅したりします。この種の夫は、軽蔑すべき人々の中でも最低です。妻に対する態度として、神様

が夫に求めておられる教えに完全に違反します。こういう人は、「夫たるものよ、妻を愛しなさい。」という意味をまったく理解していないのです。

主にある結婚生活

こういう考えも、心に留めておきましょう。妻に対して優しい夫がいます。夫は、生活に必要なものをすべて妻に与えます。思慮深く、寛大です。よく相談し合い、親切です。ところが、霊的な問題になるといやがって、いっしょに礼拝を守りません。妻の命の中で最も奥深く、かつ神聖なる部分については口を閉ざします。だから、妻は一人で教会へ行きます。一人で聖餐式を受け、一人で膝をかがめて祈ります。魂に関する希望や困難や抱負を、一人で胸に秘めるのです。世界中の誰よりも、夫がイエス・キリストを救い主と信じてくれるように、ただ一人祈ります。夫は、これらすべてにおいて、妻の思いを共有しません。

「また、家が内輪もめをしたら、家は立ち行きません。」(マルコの福音書3:25)

夫は、結婚式での誓いを否定します。神様は、体と魂と精神を持つ者として私たちを造られました。この神聖な精神的関係を否定することは、夫婦関係の最も重要な部分に対して目をつぶることになります。このことは、神様のご計画から外れた結婚をした妻に対しても言うことができます。いつまでも変わることなく主に仕える結婚生活は、神様の恵みによってのみ支えられ、夫を救いに導いてほしいと願うのです。

「同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。」(ペテロの手紙第一 3:1)

もし夫婦が、魂と精神において一体でなければ、結婚は神様のみ心にかなっていない。夫だけが一方的にそうするなら、完全なまちがいで、非難されるべきであり、また神様はその夫を裁かれます。そんな夫の態度は、クリスチャンの妻や家族に対しても大きなまちがいです。その結果は裁きの日に明らかにされるでしょう。

結婚では、心と心が永遠に一つに結ばれます。一つに結ばれてこの地上で過ごす年月は、死の陰の谷を越えて、永遠に続く結びつきを準備する期間でもあります。ですから、結婚生活が破れると、天には大いなる悲しみがあり、神様は祝福したくてもできません。神様は、私たちの涙をすべて拭い去ってくださいますが、残念な思いは残るでしょう。妻や子どもたちと正しい関係を築かず、自分の人生を神様にささげない夫を、神様が助けてくださるようには私たちは祈るだけです。

もしあなたと神様が正しい関係でなく、今すぐにでもそれを修復したいと願うなら、それができます。友人が家のドアをノックすれば、ドアを開けて招き入れるでしょう。イエス様は、あなたの心のドアをノックしておられます。しかし、そのドアを開けて招き入れるのは、あなた自身なのです。イエス様は、あなたに招かれて初めて、あなたの心に入ってこられます。それから、あなたの心をきれいにされ、そこをあなたとイエス様の日々の交わりの場とされます。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(ヨハネの黙示3:20)

第 3 章

妻—家庭の要

もし、結婚における妻の心構えを学ぶためにこれを読もうとするなら、旧約聖書の箴言 31章を開いてください。(特に10～31節をじっくり読んでください。)この聖書の箇所は、結婚における妻の役割を理解するのに大きな助けとなります。

次に述べることは、神様が創造の初めから意図している夫婦の美しい関係を示す聖書の箇所を、日常生活の中で理解する手助けになります。

すべての女性が、未来の夫に対して、自分は価値があると思っていることを前提として

話を進めます。箴言 31 章 10 節で、妻の価値はルビーよりもはるかに尊いと言っています。男性が求婚するときは、地球上のすべての女性の中から、あなたを選びます。これは同時に、天の天使がうらやむような責任と機会をもたらします。自分で考えている以上に、この世の中で子どもや夫に対して、重要な役割を果たす運命を担います。あなたは、夫や子どもたちや家庭で、誰よりも何よりも将来的にも大きな影響を持っています。彼らの成長も運命も、大半があなたの手にかかっています。「子どものしつけは家庭から」と言われるゆえんです。両親ともども、家庭での存在感があります。しかし、しつけや時間的長さから言っても、母親の方が子どもの習慣、性格や考え方を形成するのに深く関わります。お母さんの影響はかなり強烈なのです。（箴言 31 : 28）

「妻」とは、「機を織る人」という意味です。妻とは、彼女が考えている美しさとか模様を家庭に織り成す人です。織り手の心を反映させるためには、すべての糸でお互いを補い合い、お互いを信頼しなければなりません。クリスチャンの妻によって織りなされる家庭は、聖霊の働きを表わす美しさと恵みを、日常生活の中に表現することでしょう。そして、それが子ども達と夫の生活にはっきりと反映することでしょう。「しっかりとすることをする女は多いけれど、あなたはすべてのまさにまっさらです。」（箴言 31 : 29）

家庭は妻の城です。主なるイエス・キリストは教会のかしらであり、そして聖霊が今も生きて存在します。聖霊がみことばに裏打ちされた規則を強調してくれ、教え、示唆し、影響を与える案内人のように、妻は家庭の中で聖霊のようなものです。家の中における妻のすべての影響力は、ちょうど教会の中における聖霊の働きと同じです。妻は、夫と子どもたちを信仰的に育てるために、理解、励まし、慰め、教え、導きをを与えます。

よい妻とは、昔からこのように語られています。「よい妻とは、天からの最後で最上の贈り物です。数え切れない恵みの天使です。彼の多くの財産の中でも最大の宝物です。妻の声は甘美な音楽であり、微笑みは輝く陽のようです。妻のキスは純潔さを保ち、妻の両腕は安全なふところで、妻の勤勉さは、夫にとっては確かな財産です。妻が家庭をきちんと切り盛りすることは、夫のもっとも有能な執事と言え、妻のことばは夫のもっとも安全なカウンセラーとなり、妻の胸は、夫のもっとも安らぎのある柔らかなまくらであり、妻の祈りは天上の祝福を守るとりです。」

以上述べられてきたことが、理想的な妻の必要条件ならば、それらは結婚する前に問われる者です。なぜなら、妻は家庭の大事な要ですから、よい妻となるために、要求されるすべてのことができるかどうか自問しなければなりません。どんな人が良妻賢母と言われる人になれるのでしょうか。これが本当にあなたの願う人生でしょうか。

クリスチャン同士の結婚のために、神様が望まれているご計画を考えて、その在り方をいくつか挙げてみましょう。

助け手

ここでは広い意味での言葉を用います。聖書の箴言に出ているよい女性のあり方をもう一度読んでください。「その夫の心は彼女を信頼して…」夫は、妻がもっともすばらしい友であり、助け手であることを知っています。もちろん、妻は夫のものです。妻が夫の興味や計画のすべてに忠実であることを知っているならば、夫も妻に対して同じように接するべきです。妻は夫の味方になり、夫の夢を高めてくれます。結婚した美しい妻以外に、夫の将来を実現して発展させ、必要に応えてくれる女性はいません。

家庭の管理

仕事によっては、男性と女性は確かに平等です。ビジネスの世界では、男性と女性が張り合うこともあります。この仕事の本当の目的は何かと言うことを、自分自身に問うべきです。権力、お金、自我、見栄、評価、権利、物質主義などが目的かもしれません。しかし、それらすべてが正しいとかまちがっているとかは言えません。しばらく妻が働きに出て、もし収入が増えたとします。もっといい家、新しい車、何か習い事を始めるとか、挙げればきりがありませんが、そんなことができる余裕が出てきたとしましょう。調査によると、おもしろいことに、収入が増えてもさらに上を望むために、二人はいつまでたっても、夢見た生活の基準には決して到達しないそうです。また、夫婦二人の収入で決めた生活の基準に一度慣れてしまうと、一人だけの収入でやり繰りすることができなくなるそうです。これは、夫婦がはっきりとした聖書の教えの見解を見失ってしまったからです。

聖書の見解に考えて、特に子どもがいるときは、神様はこんな状況を本当に望んでおら

れるでしょうか。聖書は、年配の女性に勧めます。「慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができます。それは、神のことがそしられるようなことのないためです。」（テトス2：5）

もし神様のご計画のように、家庭が私たちの生活の最優先項目であるならば、家での優先順位を、聖書が教えているように整えていかなければなりません。妻が家を守ること、子どもを愛すること、家族のために家庭を天国のようにして、子どもと家を守っていくことに満足を得るようにと、神様は願っています。

もし妻が、家を守れることを習得できなかったり、そうするつもりがないなら、そうすることのできるほかの女性を探すべきです。

幸せな結婚生活には、きちんと守られた家庭が絶対に不可欠です。こんなことは、若いカップルにとって、夢のない話かもしれませんが、絶対に大切です。多くの幸せな結婚は、両者が忙しくすれ違うことによって壊されていきます。特に、部屋がきれいに片付いていない、食事が用意されていない、子どもはほったらかし、遊び道具も片付けず、きちんとした場所に置かれていない。整理整頓が仕事を成功させる第一条件の職場から、夫はこのような家に戻ります。すべての企業マンは、仕事を順序よく、効果的にするように要求されています。これがビジネスで成功するために要求されているとしたら、家庭を支えるためには、どんな必要条件が挙げられるでしょうか。

夫は忍耐強い人かもしれませんが。しかし、家の中がきちんとしておらず、何がどこにあるのか、あるべきなのか、あるべきものがないような秩序立っていない家にいつも帰ってくるとき、夫は家庭の団欒も、家庭への楽しみもうせてしまいます。ものが取り散らかされ、整理されないで、前に使った場所にきちんと置かれていないでなくなったり、落とされたりしているとき、夫は家でもイライラをつのらせ、甘い気分など窓から飛んで行ってしまいます。

もし妻として、活気あふれた生き生きとした愛の関係を続けたいと願うなら、職場のイライラから解放される安らぎのある家庭を作るべきです。夫の立場に立って考えてください。もしあなたが家に戻ったとき、こんな風でいいと思いますか。愛と尊敬は、夫婦の関係を結ぶ絆でなければなりません。家庭をきちんと管理するかどうか、夫婦の関係を壊すか築くかを大きく左右するのです。すべての関係がそうであるように、家庭も基盤を持たなければなりません。そして基盤の重要な礎の一つは、よい家庭の管理です。

夫婦の対話

おりにふれ、すべてを分かち合うためにも、夫婦の対話は一方的であってはなりません。夫婦の間では、主題にもできごとにも決まりはありません。それと同時に、信頼して分かち合ったものは、信頼を持って受け止めなければなりません。もしこの原則が破られると、夫婦関係の信頼の基盤が著しく傷つけられます。隠しごとをせず、秘密を持たず、妻が夫に対して全信頼を寄せるのであれば、家のことを話すときは、家の内でも外でも注意する必要があります。

ひいき目にみても、夫は妻を苦しめることがままあります。時々、夫は妻をイライラさせ、嫌な思いをさせる欠点を持っています。あれやこれや嫌なことをすることもあるでしょう。賢い妻は、外でも家の中でも、または子どもたちの前でも、決してそんなことは言わないでしょう。妻は夫にだけ話し、そしてそれらについて神様に祈るでしょう。妻は、常に夫の欠点を正そうと努力するかもしれませんが、しかし、それは自分の心の中の問題として留めておき、愛を持って耐えるべきです。聖書の箴言31章は、敬虔な女性のための特別な章です。特に、この25節を心に留めてください。「彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。」（25節）

ここでは、よく起こる致命的なまちがいについて触れておきます。妻たちは、尊敬すべき夫の失敗を思いやりもなくべらべらと、ほかの人にしゃべることがあります。時として、妻たちは、愛が欠点を覆い隠すことを忘れて、ほかの男性にも夫のことを話します。夫の失敗を聞かされている男性は、こんな風に話している女性を妻にしている夫は、何て気の毒だろうと思っているのです。すなわち、妻は自分自身のぶしつけな態度のしっぺ返しを自らの身に招いています。家族や家のことをほかの人に話すときは、心と言葉に注意しましょう。

イエスさまを心に

現在、世界中の広告は、美しさとは性を強調するものと思っています。多くの女性は、そんなことが真実ではないと悟らず、美しさが結婚、幸せ、成功をもたらすという世の中の考え方に惑わされています。結婚の誓いがされ、一緒に住み始め、お互いの本当の姿が見え始めます。このことにおいても、聖書は何が大事なのかを示しています。「麗しさはいつわり。美しさはむなしい。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。」
(箴言31:30)

ある人は言います。「美しさは、見る人の目に宿る。」本当の美しさとは、世の中で言われている、減量、スタイル、服装、化粧など、美しくなるために必要と思われるあらゆるもので作られるものではありません。「私たちの神、主のご慈愛が私たちの上にありますように。そして、私たちの手のわざを確かなものにしてください。どうか、私たちの手のわざを確かなものにしてください。」(詩篇90:17)

最後まで残る真の美しさとは、外面的なことではなく内面的なものです。まだ愛情深い年配の夫婦に出会ったことがありますか。妻が、夫のために常に美しくしあろうとするのは、とてもいいことです。年月が経てば、頬からバラ色が消え、歌うような声だってなくなるかもしれません。しかし、心と魂の中からのにじみ出る愛の美しさこそは、夫にとっていつまでも、本当に愛らしい妻に違いありません。妻が自分の一生を、愛らしく、暖かく、親切で、敬虔さを持って常に過ごすなら、年老いていくのを自然に受け止められるでしょう。

結論は、性格のこと、つまりあなたの本当の姿に戻ります。よい妻とは、よい女性になるばかりでなく、敬虔なクリスチャン女性になることによって完成するのです。結婚生活は、夫と妻の双方に大きな要求が課せられています。それは厳しい訓練ですが、同時に価値も大きいものです。妻としての義務は、クリスチャンでない女性にはほとんど不可能です。試練、当惑、不幸と失望、悲しみと憂いがあり、キリストが心の中にいなかったら、それらは到底耐えられません。すべての奥様方、あなたの真実の身近な友として、家庭の中にイエス様をお迎えしましょう。

第4章

子どもたち —— 家のたから

チャールズ・ラムは、こういいました。「死んだ母親を呼び戻し、その前に膝まづき、優しい母の心を痛ましめた数々の悪い行いを許してくれるように頼めるならば、この地上のどんなものを差し出しても惜しくはない。」確かに、年齢を重ねると、思慮深い人ならこのように考えるし、両親がしてくれたことを理解するものです。

子どもは幼いので、家庭の一員ではないと考えてはいけません。時計の歯車は、あるものはとても小さいですが、正しく時を刻むためにどれも大切です。幼い子どもは、すぐかんしゃくを起こして、気難しくなり、家族全員をいらだたせたりすることもあれば、とてもかわいくて、賢かったり、家族全員に安らぎと元気をもたらしたりもしてくれます。

従 順

両親がすべきことは、三つあります。愛すること、しつけること、そして教えることです。では、家庭における子供の義務とは何でしょうか。子どもの役割とは何でしょうか。

聖書は、「子どもたちよ、両親が正しいときには従いなさい。」とは教えません。
「子どもたちよ、(たとえ両親が間違っているとしても)
主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。」(エペソ人への手紙6:1)
と教えます。

イエス様の幼児期の記録が、まったく見当たらないという人がいます。しかし、イエス様の幼児期の記録は、わずかですが残っていて、明らかにされています。本当にすばらしい表現で、イエス様について語られています。

「それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。」(ルカの福音書 2:51)

つまり、イエス様は母親と養父に仕えました。イエス様とは、だれでしたか。両親に仕えたこの子どもは、だれでしたか。神様の永遠なる息子でした。全世界の造り主でした。

「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」(ヨハネの福音書 1:3)

イエス様は主であられ、天におけるすべてのものの主人です。その方が従順になられるとは、何とすばらしい教えでしょう。

「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。」(エペソ人への手紙6:4)

多くの若い人々は、両親に従うことが恥ずかしく、自分で自分の首を絞め、縛るものと考えます。イエス様もそのように考えたでしょうか。いいえ、そのようには考えませんでした。もし、熱心なクリスチャン両親の忠告に注意深く従っていれば、若い人の人生が束縛されたり、さ迷ったりしないでしょう。神様に仕える両親のしっかりした教えに従うならば、若者は成長を妨げられるとか、横道へそれたり、傷つけられたりほしくないでしょう。イエス様は、神様に託された働きを30歳から始めましたが、家を離れるまでは地上の両親に従いました。

従順であることは、当然です。それには、楽しいことも楽しくないことも含まれます。かぎになることばは、「主にあって」です。子どもたちは、「主にあって」従わなければなりません。クリスチャンの親でも、まちがったことを要求するかもしれません。それでも、子どもは従わなければなりません。

「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。」(コロサイ人への手紙3:20)

しかし、両親もまちがいをするを承知しておかなければなりません。どんな人間的な権威があろうとも、神様の教えを一つでも破るように強いることはできません。

聖書は言います。「また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。」(マルコの福音書9:42)

両親に対する愛と尊敬

以上をまとめると、「子どもたちよ、主にあって両親に従いなさい。」と言うとき、「両親よ、あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。」という命令を、両親も当然のこととして守るべきです。親子関係は、相互の関係でもあります。救われていない親が、子どもたちに主を否定しなさいと命じるとき、その悪い結果は、親と子どもの双方に降りかかります。

「両親に対する愛と尊敬を持ちなさい。」ということばは、若い人々へのことばとして、もっとも大切です。母親を恥ずかしいと思っている若い娘がいます。母親の美しさが衰えていき、着る物も以前ほど見栄えもせず、母親の手がやつれてしみだらけになっているのを見たとき、その娘は母親を嫌がって、友だちに会わせたくありません。

あるいは、お父さんを恥ずかしく思います。背が曲がり、風雨にさらされ日焼した顔、長年の労苦のあとを物語る曲がった手は、子どもの人生がもっとよいものになるように耐えた結果なのです。若い人たちは、きれいな流行の服を着ている友だちに、「年寄り」の親を見られるのを恥ずかしいと思うかもしれません。

こういったことは単なる作り話ではなく、実際によくあることを私たちは知っています。子どもたちは、両親の今までの苦労、年数、面倒、世話による老いのあとが、子どもたちへの愛情の結果であることを知っているのでしょうか。お父さんもお母さんも、子どもたちのために自分自身の人生を捧げて、そのようになったのです。

あなたの命を守るために、片目を失った人のことを恥ずかしいと思うでしょうか。両親は、子どもの命を守る以上のことをしてくれます。子どものことを心配して、眠れない夜もあったでしょう。子どもが病気ของときには、看護しました。自分自身の満足や楽しみを求めず、自分たちの必要が満たされなくても、子どもたちがちょっとしたぜいたくをできるようにと願い、つつましく生活しました。子どもが勉強し、この世界で偉大な働きをするために、両親は朝早く起き、夜遅くまで働板のです。その結果、年老いたので、年を重ねることは尊いことなのです。そのような親を、子どもたちは恥ずかしいと思うでしょうか。

中西部のある商人が、息子を大学に送りました。そのために自分の商売を抵当に入れ、節約してお金を貯めました。ほかの生徒たちの中で息子がきちんとした身なりをし、お金の不自由ないように、彼も彼の妻もまともな服も着ずに生活しました。数ヶ月経過したあるとき、この夫婦はどうしても息子に会いたいと思いました。(息子へ送金していたために、車を買う十分なお金がありませんでした。)年老いた馬にばねのグラグラした荷馬車をつなぎ、20マイル離れた息子のいる町に向けて、夫婦は出発しました。ちょうど二人が着いた時、クラスが終わって、生徒たちが出てきました。息子のハリーも、ほかの生徒と一緒に出てくるのが見えました。夫婦が近づくと、ハリーの数人の友だちが、彼らの古びた洋服やオンボロ荷馬車と馬を見て、あざ笑いました。ハリーは立ち止まり、両親を一瞥し、恥ずかしさで真っ赤になりました。そして、知らないふりをして二人に背を向け、急いで立ち去ってしまったのです。深く傷付いた両親は、疲れて家への長い旅路に着きました。その夜、ハリーの年老いたお母さんは亡くなりました。

もしこれを読んでいる若い方がいたら、私はお願いします。どうかハリーのようにならないでください。もしあなたのご両親が生きておられるなら、ご両親のところに行き、あなたがどんなにご両親を愛し、自分のためにしてくれる全てのことに感謝しているか伝えてください。もし遠く離れているのなら、愛と感謝、喜びに満たされた長い手紙を書いてください。

子どもはいくつになっても、親の子どもであることに変わりありません。ですから、両親が生きている間は、愛と尊敬を示しましょう。この世の中で、成長した息子や娘が、年老いた親に対して献身的な思いと愛を示すことは、何と麗しいことでしょうか。そして、それは神様に喜ばれることなのです。

親が年老いていくとき、子どもたちと役割が入れ替わります。子どもが幼いときは、親が子どもたちの世話しました。今度は、親の世話をすることが子どもたちの役目になり、大きな名誉になります。かつては、親が子どもたちを嵐から守ってくれました。今は、子どもたちが嵐から親を守る番です。成長した子どもたちが強くなり、親が弱く、力がなくなります。今までの借りを、愛を持って少しずつ返す機会が来ました。愛を持って育ててくれた信仰的な親に、全ての借りを返すことは、もちろんだれにもできません。

人生の中で、両親に必要とされたとき、また頼られたときに、温和で誠実に優しく接したと思えるなら、こんな満足なことはありません。平安があり、天国で再会する栄光の日が楽しみになります。死を前にして、もうどうすることもできなくなったときに、思い残すことなく「さようなら。」と言えることは、本当に大きな祝福です。

第5章

家庭の子どもたち—家族の絆

「見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。」(詩篇 127:3)

神様が両親に授け任せられた生まれたばかりの赤ちゃんを見ると、本当に感動的です。夫として、妻として、任せられた役割は最高のものです。両親の教え、手本によって子どもは育ちます。子どもの人生の喜びや学びの中で、泣いたり、笑ったり、歌ったりするのを聞くのは、すばらしいことです。ある研究によると、子どもたちは85%の影響を家庭から受けるそうです。子どもは、家庭を反映します。両親から教えられ、両親の生活を通して、神様と神様のみことばである聖書にも出会います。子どもの身体の成長と永遠の運命は、両親の手中にあるといっても過言ではないでしょう。毎日祈ることがたくさんありますが、その中で最も重要な祈りは、子どものために祈ることです。そしてそれは両親の生涯の課題なのです。

子どもが親の意思に反して、親の心が痛むこともあるでしょう。明らかにまちがった選択をすることもあります。しかし、もし子どもが道から迷い出たら、ルカによる福音書 15:11~24

にある放蕩息子の話を思い出してください。お父さんは、愛する息子のことを祈り、心配し、いく晩も眠れない夜を過ごしたに違いありません。そして、息子が帰ってこないかと、いつも道のかなたを見ていました。息子が帰って来たときには、お父さんの心はすでに許していて、どんなに悪いと思っているかを語ろうとする息子に、最後まで語らせませんでした。それが、真のクリスチャンである親の心です。

ある農場で、20年以上もたった建物を取り壊した人の話があります。取り壊した後は、醜い汚い跡が残りました。雨が降り、日が照り、そして4月になりました。すると、昔建物があつたところに数え切れないほどたくさんの花が咲き、その人はびっくりしました。明らかにその種は、前からずっとそこにあつたはずで、雨と日光がなかつたので育たず、花を咲かせることができなかつたのです。多くの家庭には、このように芽を出していないすばらしい未来の種があるのです。

家族の対話

我が家では、子どもたちはいつでもどんな質問をしてもよい決まりがありました。私たちは、子どもたちにどんなことでも話すようにと言って聞かせました。また子どもたちは、私たちと違う意見を持つこともできました。しかし、我が家にはもう一つの決まり「全てのことを話し合うことはできるが、妥協されるわけではない。」がありました。そして、子どもたちが大きくなるにつれ、私たちは聖書についてたくさん話し合いをしました。それによって、子どもたちは深く考えるようになったと思います。また、私たち親が何を信じ、聖書が何を教えているかを、子どもたちは強く確信することができたと思います。子どもたちが話をしたければ、私たちはいつでも聞くことにしていました。子どもたちは、寝る前によく質問をしました。多くの場合は答えが欲しいからではなく、まだ寝たくないからですが、でも私たちはその機会を利用しました。そして、子どもたちが話したいことに、私たちは興味があることを示したのです。

家庭における大きな失敗の一つは、対話が少ないために、親は知識や経験、意思、そして信念などを子どもたちに十分に伝えないことです。多くの場合、子どもたちは家庭の外で、親しい友だちからいろいろな情報を得ます。時として子どもたちは、家で得られない答えや、家では聞けないことを友だちに聞きます。それは、兄弟であったり、姉妹の場合もあります。近所の子どもだったりもします。その子どもたちは、まちがった答えをしている可能性があります。その理由は明らかです。いつも一緒にいる家族生活は、時として近すぎて、変わり映えのしない関係と性質を持っているために、子どもたちにとって興味や新鮮さがないからです。子どもたちの一番の親友は、兄弟姉妹ということを知る必要があります。友だちはできたと思っても離れてしまいますが、家族は永遠のもんです。どんなに親しくなっても、家庭以外の友だちは、兄弟姉妹ほど真実で近くはなりません。アメリカには「血は水よりも濃い」ということわざがあります。つまり親族の絆の方が強いということです。家族愛と愛情は本能であって、育む必要はないと多くの親は思っています。この考えは、大きなまちがいです。親は、人前でも愛情をはっきりと示す必要があります。ほかの場合と同じように、犠牲、訓練、自制、相手への思いやりは、家庭の絆を深めます。家庭でしっかりと愛が示され、教えられなければ、一緒にいるからといって愛があるとはかぎりません。親から、「ごめんね」、「許して」などのことば、また愛情を表現することばを聞くことは、生涯残る子どもたちへの学びになります。

兄弟の守り

チャールズとメリー・ラムの有名な話があります。姉のメリーは、発作的精神異常のために、母親を殺してしまいました。彼女はその時から、その凶暴な発作を繰り返すようになりました。チャールズとメリーは、その発作の前兆が見え始めたら、手を取り合つて精神病院に行きました。彼女は、病院で数時間監禁されなければなりません。手をつないだまま悔しさに泣きながら、精神病院への小さな森の道を歩いているチャールズとメリーに出会つた友達の話です。この試練は1年や2年ではなく、弟チャールズが35年間ずっと愛と忍耐によって背負つたものでした。そうです。兄や弟は、姉や妹を守るべきです。

男である兄や弟が、姉や妹を守るもう一つの方法があります。若い男性は、誰が不純で危険な男性かがわかります。そんな男性が、純粋な自分の姉や妹の相手になることを、黙ってみているわけにはいきません。もし真の兄や弟であれば、不遜な男性の人格について姉や妹に忠告するでしょう。姉や妹は、親しくなる相手の男性について、自分の兄や弟の忠告や助言を求め、心に留めるとうまくいくのです。

同じように、兄や弟もデートすることを考えている相手の女の人のことを、率直に姉や妹に相談するのがよいでしょう。女の子は女の子のことが、男の子は男の子のことが理解できるからです。その女の人が兄や弟にふさわしいか、それとも本当の性格を隠して、ただいつわりの女らしさで兄や弟をだまそうとしているのかが、姉や妹にはわかります。真の姉や妹であれば、それを兄や弟に言うでしょう。そして兄や弟も、姉や妹と同じようにすることでしょう。

兄弟姉妹の助け合い

今の若い人たちが、自分を清く保つことはむずかしいことです。「みんながしている。」とよく言います。しかし、それはいつわりです。たとえば、みんなが麻薬をしているとしましょう。すると麻薬をしてもよいことになるのでしょうか。そんなことは、決してありません。すべての若い人たちにとって、純粋で道徳的な人生を歩むことは、むずかしいかもしれません。しかし、それは選択を誤ってはいけません。妥協するようという誘惑は、四方八方からきます。神様は、「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」(ローマ 6:13) と言われています。

多くの場合、女性よりも男性の方が巧妙に誘惑されます。しかし、第1コリント10:13のみことばを覚えておくといいいでしょう。そこには、「あなたがたのあった試練は、みな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」と書かれています。

こういうときに、姉や妹は兄や弟を助けることができます。純粋で清い魅力を持ち、行動と態度で模範となれば、兄や弟が社会に出ても、あなたの人柄の記憶が盾となるでしょう。悪に誘惑されるとき、姉や妹を思い出すと、誘惑している女の人とうんざりして嫌気さすはずですか。姉や妹が、兄や弟によい影響を与えるように心がけることは、とても価値あることです。姉や妹は、貞操がどんなに素晴らしいかを示すことで、兄や弟が悪いものを拒絶できる助けになります。姉や妹にとって、兄や弟から「お姉さん(妹)のような人と結婚したい。」と言われれば、うれしいでしょう。箴言31:10に、「しっかりした妻をだれが見つけることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。」とあります。

また同時に、兄や弟は、立派で、純潔で、そして高貴な男性とはどういうものかという模範を、姉や妹に示すべきです。姉や妹は、兄や弟の人柄や言葉使いやキリスト者としての証を基準にして、男性を選ぶことができます。ルカ 6:45に、「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」と書いてあります。ですから姉や妹は、兄や弟の模範に合った夫を選びます。兄や弟の人生や人柄のお陰で、姉や妹の理想は高くなり、立派なふさわしい男性と結婚します。そのようにして、姉や妹は守られるのです。

「守る」ということは、今の世の中ではとても重要なことです。ポルノによってテレビ、雑誌、インターネットが低俗化しています。ほかの公共の場の道徳も、悲惨なほど低下しています。「最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。」と、ピリピ 4:8には書かれています。女の子の多くは、自分たちにどんなに大きな機会と責任があるかに気がついていません。女性から尊敬され、信頼されている以上の人に、男性はなりえません。また、国家はその女性よりも高くそびえ立つことはありません。過度な責任の重荷を女性に負わせたくはありませんが、家庭での姉や妹、また一般の女性が気づいている以上に、その兄や弟やほかの男性の将来は、女性たちの手中にあるのです。

兄弟姉妹は、愛とつながりを生涯守るべきです。だんだん疎遠になることは簡単です。引越しをし、家族が増え、興味・責任が違ってくると、兄弟姉妹の関係を親しく、固く保つのはむずかしくなります。しかし、できないことはありません。私たちに、昔の人たちにはなかった便利な連絡方法があります。メールや電話やほかの方法で、瞬時に連絡がとれます。何か質問があるときには、遠慮なく相手に聞き、相談できます。そうあるべきですし、すでに多くのクリスチャンホームではそうしています。共通の過去と祝福、そして家での思い出が、兄弟姉妹を結合させます。家族は神が定めたもので、この世だけでなく永遠なのです。ですから、そのために備え、互いの忍耐と助け合う気持ちを持って、愛と責任を持って生きていこうではありませんか。

かつてはとても親しい家族関係だったのに、誤解や批判によって絆がうすれ、緩み、冷たく、無関心なものになってしまったのなら、どんなことをしてでも修復してください。電話をかけたり、手紙やメールを書くことが、もとの絆を修復する第一歩かもしれません。ぜひ考えてみてください。

第6章

家族の思い出

私たちは、日々生きていく中で思い出を作ります。思い出は毎日積み重ねられ、最終的には、人格を作り上げるほどの大きな影響力を持ちます。時として、私たちは、子どもや孫とひざを交え、何時間も、家族のことや過去のできごとを話し合います。家族が共にいる時は、共に笑い、泣き、またすばらしい家庭を与えてくださった主を賛美します。「いつだったか覚えている？」と、当然のように思い出を語るでしょう。

この地上におけるキリストの苦しみや悲しみは、父なる神の家から遠く離れていることが原因でもありました。イエス様は、人々を愛しておられました。父なる神のもとで持っておられた栄光と喜びがないことを、寂しく思われたに違いありません。それは、天国の一部分でもあったからです。

私たちは、絶えず思い出を作っています。その過程によって、人々の生き方はそれぞれの異なります。老いてからの毎日が幸か不幸かは、その思い出で決まります。それが思い出の役割でもあります。もっとも心に残る思い出は、私たちにとっては、子どもたちにとっても、クリスチャン家庭の日々の生活の中にあるべきです。

家庭での思い出には、食事のとき、祈りのとき、ゲームのときなども含まれます。家族旅行に行ったときのこと、一緒に育てたペットのこと、そして数々の気持ちのすれ違いなどもありました。いろいろと問題もあったでしょうが、すべてを一緒に切り抜けてきました。私たちは、家族として、日々思い出を作っています。もちろん、どれが最後の思い出になるかはわかりません。

人の運命は、わからないものです。いつ最後の食事になるか、最後の会話になるか、最後の散歩になるか、人にはわかりません。別れるときや、すべての電話や、メールや、手紙の最後を「愛しているよ。」という言葉で結ぶ家族を、私は知っています。誤解のままや、言い争いや、むっつりした不機嫌のまま、朝出かけてはいけません。なぜなら、それが最後の苦い思い出になるかもしれないからです。家庭を守る一番の方法は、この本の初めにも書いたように、「ごめんね。」「許して。」「そして、「愛してるよ。」という特別な言葉を言い合うことです。「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。」(箴言15:1)

ある穏やかな性格の男性が、仕事に出かけて1時間もしないうちに、遺体で家に運ばれました。ほかの誰よりも、激しい悲しみに襲われた1人の姉妹がいました。彼女はただ、「今朝、彼が出かけるとき、私は意地悪をしてしまった。」と悔やみ続けるばかりでした。特別に悲しむ悔いを残してしまっただけです。

一度作られた思い出は、永遠に変えることができません。

子どもの思い出

私は、何度か大都会に行きました。道を行く人や帰る人、大きな建物に出たり入ったりするたくさんの人々を見かけました。それぞれ別々の方向に、せわしく歩いて行く人を観察するようになりました。そして、人々を見るたびに、それぞれの人の心と人生には、育った家庭の思い出があることを、いつも考えさせられます。

あなたの子どもは、家庭についてどんな思い出を持つでしょうか。あなたは親として、主イエス・キリストを愛し、毎日の生活の導きをいつも聖書に求めているでしょうか。慰めや、励ましや、恵みの思い出を持っているでしょうか。それとも、傷の深い、焼かれるような、心を刺すような、呪いに満ちた思い出を持っているでしょうか。私たちは、このことを真剣に考えなければなりません。子どもたちが社会に巣立っていても、生涯、家庭での思い出や影響から、完全には離れることができないからです。もし、子どものときの家庭が温かく真実であるならば、それは一生の祝福です。

「罪が、勢いの激しい火のように、魂を吹き飛ばすかもしれません。悲しみが、すべての喜びや希望を吹き消してしまうかもしれません。しかし、優しく、甘く祝福された家庭での思い出は、深い闇にただひとつ輝く星のようなものです。たとえ罪の真ん中にいても、消えゆく夢のように、その光景が目に見えます。」

ある男性の話があります。
「毎晩のように、小さな2階の寝室で、眠る時間に、ベッドに横になっていたときのことを思い出します。階段を昇るやさしい足音が聞こえ、静かに戸が開きます。暗闇の中で、やさしい母の姿が見え、私のベッドの横にきました。初めは、快い愛情のこもった言葉をかけてくれます。そしてだんだんに、深い励ましの言葉に変わります。やがて母はひざまずき、顔を私の顔に近づけます。母のとても真剣な夢と希望が、祈りとなって聞こえてきます。母親は、子どものために何と大きなことを願うものなのでしょうか。母の涙が、その願いの真剣さを示していました。時々、私の顔に落ちてきた涙を、今でも感じるがあります。それから母は立ち上がり、お休みのキスをして部屋から出て行きました。」

そのような思い出は、親が子どもに送る最大の贈り物です。その思い出が防波堤となって、誘惑

や罪から子どもたちを守ってくれます。それは、子どもたちを神様のみ足につなぎとめる金の鎖ともなります。子どもたちの人生をそのような思い出でいっぱいにするために、私たちは喜んで時間を割くべきではないでしょうか。私たちは親として、何といたも簡単に軽率になってしまうでしょう。何と、怠惰で怠慢でしょうか。神様が、親である私たちを赦してください、助けてくださいますように。

時々、悲しみが正しく受け止められないことがあります。もし家庭が真のクリスチャンホームであれば、悲しみによってすべての光が消えることはありません。むしろもっと優しく、愛の溢れたものになります。家族はもっと神様に引き寄せられます。神様にきよめられると、家庭を変え、神様をもっと親しく感じるができます。多くの場合、悲しみの記憶が心と心を結びつけてくれ、家庭をつなぎとめる最も優しく、かつ強い絆ともなるのです。

この本の終わりにあたって、私たちが忘れてはならないことがあります。最高の思い出を持つために、キリストが私たちの家庭の基礎であることです。毎日、共に聖書を読み、家庭礼拝で祈る時間を持つべきです。21世紀も、あつという間に過ぎ去りますが、思い出は残ります。私たちの人生に目的を与え、方向を定めてくれる安定した強い基礎は、キリストにある家庭です。(1コリント3:11-13)

モーツアルトに関する感動的な話があります。彼の最後の作曲は、レクイエム(鎮魂歌)でした。何日も病気で苦しんだあと、やっと作曲が終わろうとしていました。ちょうど彼が最後の記号を書き入れているとき、彼の美しい娘エミリーが部屋に入ってきました。作曲した原稿を彼女に渡しなが、モーツアルトは言いました。

「私の可愛いエミリー、ほら、終わったよ。私のレクイエムは終わった。そして私も、もう終わりだ。」
優しいエミリーは言いました。「そんなことを言わないで、お父さん。今日は、いつもより元気そうよ。」

「もう私が元気になることはないだろう。」とお父さんは答えました。「でもエミリー、この曲をピアノで弾いて、亡くなったお母さんの讃美歌と一緒に歌っておくれ。」

エミリーは言われたとおり、優しい思いと豊かな声で歌いました。歌い終わって、喜んで父の笑顔を見ようと思って振り返ったエミリーは、天に召され、平安な父の顔を見たのです。モーツアルトは、自分自身のレクイエム(鎮魂歌)によって、送り出されたのです。

この地上で最後の時を迎えた心に、暖かく、安心するレクイエムとは、祝福された清い家庭の思い出にほかなりません。それは、天使の歌声よりも美しい音色で、心の中に流れてきます。そのような美しい家庭生活を、毎日送ることができるように、神様が助けてくださいますように。

最大のごほうびは、私たちの子どもや孫、そしてその後続く子孫が、私たちの模範にならい、大切な聖書のみことばを基準とし、キリストの導きを求め、同じようなクリスチャンの家庭を建てあげることです。第1テモテ

6:19にあるように、私たちの家庭が「また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。」場所となるようにしましょう。

クリスチャンホームは、この地上で最も天国に近いものです。私たちは、この事実の証人になることを目標にしましょう。